門岡　康弘氏の学位論文審査の要旨

論文題目

我が国の医師と一般市民を対象とした無益な治療についての研究

(A Study on the attitudes of Japanese physicians and laypeople toward futile treatments)

「無益な治療」は主に終末期医療にかかわる臨床倫理問題であり、治療実施に関する医療者-患者間の意見の不一致・対立という図式で論じられる。本邦ではこの問題はこれまでほとんど議論されておらず、終末期医療を混乱させる一要因であることが示唆され、その解決には適切な治療・行うべき治療に関する社会的合意の形成が必要であると考えられている。

本研究は、我が国では無益な治療の問題がどのように存在するのか、医師ならびに一般市民のこの問題に対する考えと、両者の相違を評価することを目的として行われた。

調査１では、日本人医療者を対象に面接調査を行い、自身が無益と判断した治療の実施経験について質問した。そのような治療の実施理由、治療の無益性の判断根拠、無益と判断した治療の中止や差控えに対する考えなどについて、質的内容分析によるカテゴリー化を行った。その結果、回答者全員がそのような治療の実施を経験しており、患者側からの治療実施の要求だけではなく、意思決定プロセスの不調や治療中止に関する制度の不備などがその実施理由としてあげられた。調査２では、調査１の結果を元に質問票を作成し、我が国の医師と一般市民を対象とした量的調査を行った。医師群よりも一般市民群のほうが、無益性が問題となる治療の実施には有意に肯定的であった。治療の無益性の判断根拠については、医師群は医学的事項や患者の QOL への治療の影響を重視し、一般市民群は患者の家族の治療実施に関する意向や治療がもたらす心理的影響を重視するといった相違がみられた。また医師群の約９割が自ら無益と判断した治療の実施経験を有しており、患者側の治療実施要求、意思決定プロセスにおける問題、治療中止に関する制度の不備がその重要な理由であった。

審査では、調査対象者の属性・医療資源の状況・調査票の用語への理解度の違いによる結果への影響、海外研究との比較検討、宗教の結果への影響等の様々な質疑応答がなされ、申請者はおおむね適切に回答した。これらの研究結果から、我が国においては、無益な治療の問題は決して稀ではなく、その実施理由は医師-患者間の意見の不一致だけではないこと、医師よりも一般市民の方がそのような治療の実施に積極的であることが明らかにされた。本研究における一連の調査結果は、無益な治療の問題はベッドサイドレベルではなく、社会レベルで解決されることを示唆する有意義な研究成果であり、学位の授与に値すると評価した。

審査委員長　公衆衛生・医療科学担当教授　加藤貴彦